

墓標からみた江戸時代の人口変動

関根 達人・澁谷 悠子

- | | |
|--------------------|-----------------------|
| 1. 研究の目的と問題の所在 | 4. 年代別墓標造立数にみられる地域の特徴 |
| 2. 墓標に刻まれた年号 | 5. 結語 |
| 3. 墓標・過去帳・宗門人別帳の比較 | |

— 論文要旨 —

これまで江戸時代の人口は、主として人別帳などの文書史料に基づき研究されてきた。しかし人別帳や宗門改帳は残存する数が限られており、過去帳は一般に閲覧が困難である。そうした点に鑑み、本論では近世墓標研究の方向性の一つとして歴史人口学を指向し、その可能性を追求した。

弘前市新寺町寺院街の墓標を調査・検討した結果、墓標は一般に、ある人物の没後17回忌までの間に建てられ、その際には既に亡くなっている人の分も併せて戒名などを刻むことがわかった。一方、これまで墓標の造立年に代わるものとして用いられてきた最新年号に関しては、4基に1基程度、造立年から20年以上の時間差があるものが存在することも判明した。

津軽地方の墓標と過去帳に関して、10年単位と1年単位で、被供養者数の増減を検討した結果、墓標と過去帳の連動性が確かめられた。さらに、墓標に刻まれた被供養者数の増加時期には、「生者の記録」である宗門人別帳で総戸数・総人数が減少・横ばいになっていることから、負の相関関係が確認できた。以上のことから、歴史人口資料としての近世墓標の有効性を証明できた。また、檀那寺をもつ人が死後墓標に名を刻まれる割合は、弘前城下町とその周辺において、18世紀代には2ないし3人に1人ほどであり、1830年代頃には当地域の檀那寺を有する人の大部分が墓標を建てるようになったと推察した。

北海道・九州・四国地方を除く各地の墓標調査事例について、墓標数の増減を10年単位で検討したところ、いくつかのパターンが抽出された。奈良や京都などの畿内では、18世紀前半代には早くも墓標数が急増している。それに対し東日本では、18世紀末から19世紀代に墓標造立数がピークを迎える。東日本の中でも東北地方と関東・北陸・東海地方とでは、やや異なるパターンを示すが、この差異は基本的に墓標が普及する時期のズレと飢饉による人口変動の違いに起因すると考えられる。今後、九州・四国・中国地方の事例を追加検討することにより、墓標が普及する過程や、ある程度墓標が普及した後の飢饉や疫病による人的被害をも明らかにできるだろう。

受付：2006年9月7日

受理：2007年1月10日

キーワード

対象時代 近世

対象地域 青森県津軽地方

研究対象 近世墓標、歴史人口学、飢饉

1. 研究の目的と問題の所在

(1) 近世墓標・歴史人口学の研究史

本格的な近世墓標研究は、坪井良平による京都府木津惣墓の調査に始まる(坪井 1939)。坪井は、年号が記されることの多い近世墓標の資料的特質に早くから着目し、調査項目・データの提示法・分類法を確立した。坪井は、元禄期(1688~1703年)を境に、ひとつの墓標に複数人を刻む傾向が強まり、それが近現代墓における「先祖代々之墓」(家単位の墓)の萌芽であるとした。そうした指摘は、その後の墓標研究の方向性を決定づけたといえる。坪井の研究以後、調査にかかる労力が膨大だという理由もあってか、これを継承する研究がなかなか現れなかったが、1980年代に入り、ようやく各地で近世墓標の調査が行われ始めた。近世墓標の調査は、当初、個人レベルで行われていたが(竹田 1977, 長沢 1978など)、やがて大学・地方自治体などが主体となって実施されるようになり(中川 1968, 島根県教育委員会・大田市教育委員会編 2001, 熊本大学文学部日本史研究室 2003など)、数千基を越す大規模な調査も行われるようになった(小川町編 2000, 高崎市市史編さん委員会編 2003, 白石・村木編 2004など)。近年は、ハワイやニューカレドニアの日系移民の墓標を対象とした研究も行われている(後藤 1991・1992, 朽木 2001)。

墓標の悉皆調査に併行して、様々な方向性を持った研究が行われている。それらは研究の主たる目的により、①型式学的分析、②身分・階層の分析、③寺院と檀家の関係性の分析に大別できる。①は墓標型式の編年を整備し、形や大きさなど属性間の相関関係を追求することに主眼をおく(横山 1985, 時津 1998)。①の研究の延長として、近世墓標は「認知考古学」の題材としても取り上げられている(時津・中園・濱崎 2003)。②は上部施設の墓標と下部施設(埋葬施設・副葬品・遺体)の検討から、身分・階層の違いによる差異を明らかにしようとする研究である(鈴木・矢島・山辺編 1967, 自證院遺跡調査団編 1987, 谷川 1991, 西木 1999, 坂詰編 2002, 関根 2002, 金沢市編 2003)。現存する近世墓標の数に比べ、発掘調査により下部施設が明らかになった例は未だ少ないため、墓標だけから身分・階層を追求する研究もみられる(時津 2000)。③は墓標と過去帳から寺院と檀家の相互関係を考察する研究である(関根編 2003, 朽木 2004, 関口 2004)。家格に見合った戒名を与える寺院と、より高位の戒名を求める檀家との駆け引きや、檀家の分布状況から寺院経営のあり方も検討されている。また、飢饉や疫病流行など地域史との照合も試みられている。

そうしたなかで、本論で取り扱う歴史人口の問題は、

これまでの近世墓研究ではほとんど触れられてこなかった。管見によれば、江戸市中における墓標型式の多様性を説明する際に、都市特有の人の根付きにくさ、「家」存続の難しさ(「都市墓場説」)との関連性で、都市への人口流入が取り上げられるに止まってきた(関口 2000)。

各地で近世墓標の調査事例が蓄積されるなか、調査地点毎の様相を「面」として捉えるため、調査事例を地域単位で統合し、全国的視野に立って近世墓標の地域性を明らかにする必要がある。近世の墓制は、考古学のみならず、民俗学、文献史学、形質人類学などの従来の枠組みを越えた学際的研究がしやすい研究領域といえる(図1)。学際的研究により、近世墓標は歴史人口学など様々な分野に貢献可能な歴史資料として認知されるであろう。

日本の歴史人口学は、第1回国勢調査が行われた大正9(1920)年以前の人口を研究対象とする。ヨーロッパにおいて成立発展した歴史人口学研究は、速水融によって日本に紹介された。結婚率・出生率が低い傍系家族や下人を多く抱える大規模世帯(「中世的」な家)が18世紀後半を境に解体消滅し、単婚世帯が増加することによって結婚率・出生率の上昇、ひいては人口の爆発的増加が生じたとする(速水 1973)。速水の研究以後、歴史人口学研究は多方面に展開した。研究対象地域は農村から中小都市(在郷町)や大都市へとその裾野を広げつつある(速水 1998, 高橋 2005)。また対象史料は人別帳・宗門改帳・過去帳の他に、妊婦を調査した懐妊書上帳なども取り上げられている(鬼頭 1976)。これは年一回の人別帳・宗門改帳の調査から漏れてしまう乳幼児死亡を、妊娠・出産を記録した懐妊書上帳から明らかにしようとするものである。

保健衛生学的な視点から妊産婦・乳児の高死亡率と生業の関係に注目した研究は、農繁期における妊産婦の過重労働が、出産時の危険性を高めると指摘する(大柴 1983・1985, 杉山 2004)。また、ある集団における高死亡率の要因を月別(季節別)に観察し、疫病流行とその季節性を探る研究も行われている(鬼頭 1998)。飢饉と人口変動の関係性に注目する研究は、戸主の在不在や高齢者の有無など、家族構成別に飢饉の被害状況をみるもの(湯沢・中野 1982, 鈴木 1984)や、飢饉による出生率の抑制効果について論及したもの(植村 1978, 斎藤 2000)など多数発表されている。そのほかにも、過去帳研究でしばしば不明とされることの多い檀家総人数の復元を行った研究(須田 1987)、人口趨勢から藩政改革の成否を読み取る研究(高木・新屋 2006)、系譜から武家人口の復元を試みる研究(村越 2001)など、様々な方向性が模索されている。

歴史人口学は歴史学のみにとどまらず、保健衛生学・疫学的見地からも研究が進められており、墓標研究と同

様に複数領域にまたがる総合的な研究が必要とされる。歴史人口研究はこれまで文献史料に依拠してきたが、人口史料の残存度には地域的偏差があり、文献史料だけからのアプローチには限界があると言わざるを得ない。

(2) 研究の目的と問題の所在

筆者らは、旧弘前藩領に属する青森県津軽地方で、近世墓標や飢饉供養塔の悉皆調査を行っている(関根2004, 関根編 2007)。その過程で、近世墓標が普遍的にみられるようになる18世紀以降、墓標から人口趨勢を推察する歴史人口学的アプローチが可能なのではないかとの見通しを持つに至った(関根・澁谷 2006)。しばしば大規模な飢饉に見舞われた東北地方の近世史を語る際、人口変動は重要な問題であるが、限られた文献史料だけに頼っていたのでは、いつまでたっても実態が明らかにならない。歴史人口資料としての特徴(表1)に記した通り、史料制約の多い人別帳・宗門改帳・寺院過去帳と比べ、近世墓標は北海道・沖縄を除く各地に存在しているという普遍性がある。墓標を持たない人々の存在という問題はあつたものの、人口動態における自然減少(死亡)の度合いを明らかにする際には、資料確保の容易さやデータ数

において、近世墓標は潜在的に優れた特質を有している。

本研究では、はじめに墓標に刻まれた年号について検討し、墓標がいつ建てられたかという基礎的な問題を論じる。次に、墓標と過去帳・宗門人別帳を比較し、墓標に刻まれた被供養者数や墓標数が実際の死者数の変動をどの程度反映しているか、換言すれば墓標が歴史人口資料足りうるかという問題を検討する。その上で各地の近世墓標の調査事例を集め、造立数の実態を全国レベルで捉える。最後に墓標から人口動態を読み取ることの意義と、今後の研究の展望について述べることにする。本研究は、主として弘前大学人文学部文化財論ゼミナールで調査した旧弘前藩領内の近世墓標・過去帳・宗門人別帳のデータに立脚する。調査地ならびに資料の概要は、図2と表2・3に示した。詳細は、報告書(関根・澁谷編 2007)を参照されたい。

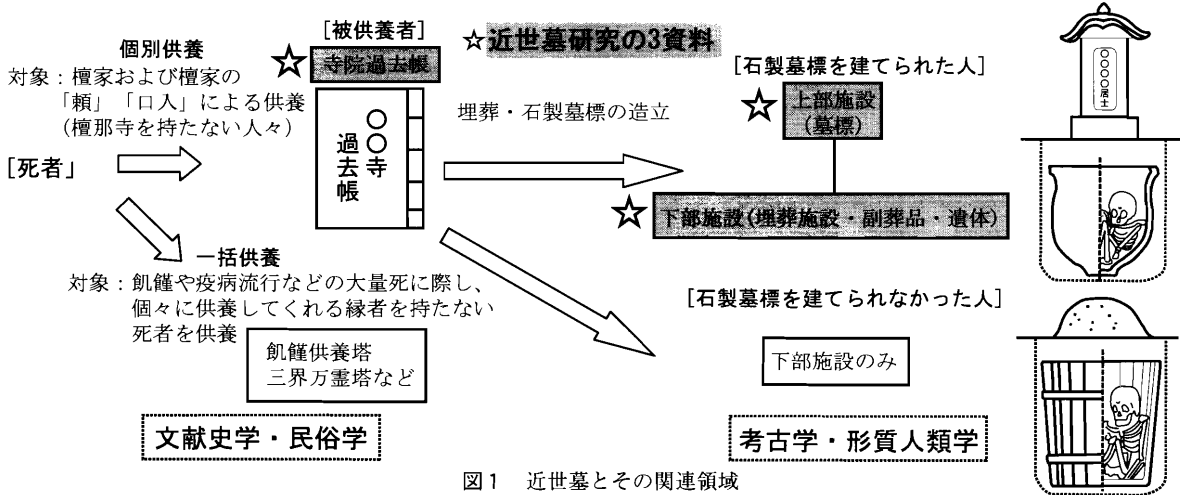


図1 近世墓とその関連領域

表1 歴史人口学関連資料の特徴

比較項目		人別帳	宗門改帳	過去帳	墓標
資料確保の難易度	残存状況	△ 史料の空白地帯あり	△ 史料の空白地帯あり	○	◎ 北海道・沖縄を除く
	公開性	○	○	×	◎ 檀家のプライバシー保護のため
実態数(近似値)における各資料の網羅率		◎ 基本的に現住地主義	○ 基本的に本籍地主義	△ 都市部の下層民は檀那寺を持たない 初期において特に子供の記載が少ない	△ 墓を建てられなかった人々の存在と、後世の墓地整理に伴う消失
各社会階層の網羅率		×	◎	◎ 同上	△(18c前半~) ○(18c後半~) 墓標需要層の拡大以前は、顧られた階層のみ建てる
人口動態における自然増加(出生)*		○	○	×	×
人口動態における自然減少(死亡)*		○	○	◎	○
人口動態における社会増減(移動)		◎ 基本的に現住地主義	○ 基本的に本籍地主義	×	×

凡例 ◎・・・比較的良好、適している ○・・・良好、おおむね適している △・・・あまり良くない ×・・・悪い、判断不能
* 乳幼児の脱漏率の高さは全資料に共通する

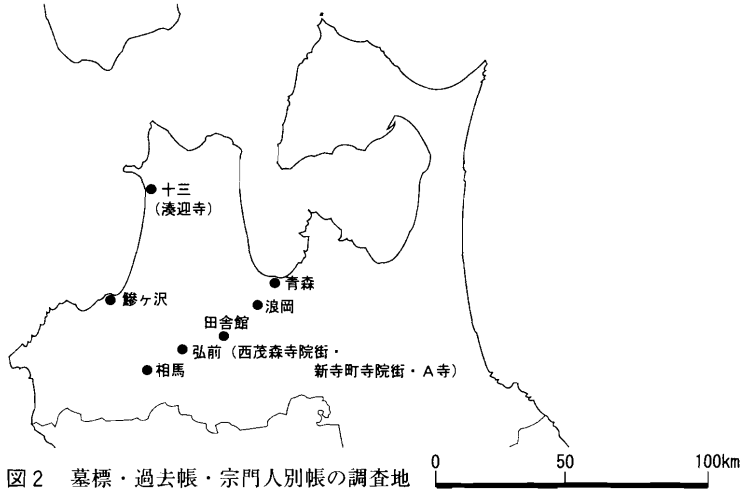


図2 墓標・過去帳・宗門人別帳の調査地
表2 分析対象一覧

近世墓標	西茂森寺院街	新寺町寺院街	田舎館村内墓地 (八木沢2000)	鯉ヶ沢町内墓地	旧相馬村内墓地(相馬 村教育委員会編1993)	旧浪岡町内墓地(浪岡町 史編集委員会編2003)
所在地	青森県弘前市西茂森	弘前市新寺町	南津軽郡田舎館村	西津軽郡鯉ヶ沢町	旧中津軽郡相馬村 (現弘前市相馬など)	旧南津軽郡浪岡町 (現青森市浪岡など)
歴史的環境	弘前城下町 弘前藩相津経為信が 慶長八(1603)年の町 割に際し、領内の寺院 を一ヶ所に配置した曹 洞宗寺院街	西茂森寺院街とほぼ同 時期に前身の寺町寺院 街が形成され、慶安二 (1649)年の大火を契機 に現在地に移動	弘前藩領田舎館組 稲作中心の農村	弘前藩領鯉ヶ沢町・赤石組 津軽四浦の一つに数えられ る港町	弘前藩領駒越組 稲作と炭焼きを生業と する山村	弘前藩領浪岡組・ 増館組・飯詰組 畑作・炭焼きを 生業とする農村
調査墓地数	27ヶ寺1ヶ所	19ヶ寺1ヶ所	16ヶ所	10ヶ寺	7ヶ所*1	詳細不明
近世墓標数	4197基(1605~1868年)	2040基(1602~1868年)	350基 (1644~1868年)	289基(1665~1868年)	214基(1651~1868年)	558基(1662~1868年)
被供養者数*2	7809人	3294人	663人	466人	343人	—

*1 個人宅・近世墓標が10基未満の墓地は除く
*2 没年不明の被供養者は除く

過去帳	A寺過去帳*3	湊迎寺(関根編2003)
調査地	弘前市	旧北津軽郡市浦村 (現五所川原市十三)
歴史的環境	弘前城下町	弘前藩領十三町 津軽四浦の一つ十三に ある寛永二(1625)年に 開かれた浄土宗寺院
冊数	12冊(1660~1868年)	12冊(1662~1868年)
被供養者数(過去帳) *2	11772人 弘前城下 3199人 その他の町・村 8412人 居住地不明 161人	7381人 十三町 3420人 その他村落 3961人
近世墓標数	89基(1656~1868年)	28基(1732~1862年)
被供養者数 (近世墓標)	262人(過去帳と照合で できるもの 約8割)	55人(過去帳と照合でき るもの 約3割)

*3 個人情報保護のため、寺名の公表を避けた

宗門人別帳	青森町戸数人別増減惣括帳 (「青森町宗門人別帳」)
対象地域	青森市安方など
歴史的環境	弘前藩領青森町 津軽四浦の一つに数えられる 港町の中心部
冊数	12冊(1852~1862年)*4
総戸数	19376戸
総人数	94322人

*4 安政三(1856)年分が2冊あり、
総戸数の多い方を採用した

表3 調査対象墓地一覧

弘前市西茂森寺院街(上寺)		弘前市西茂森寺院街(下寺)		弘前市新寺町寺院街		南津軽郡田舎館村内墓地		西津軽郡鯉ヶ沢町内墓地			旧中津軽郡相馬村内墓地		
宗派	寺名	宗派	寺名	宗派	寺名	名称	墓標数	宗派	寺名	墓標数	名称	墓標数	
曹洞宗 (上寺)	海蔵寺	曹洞宗 (下寺)	宗徳寺	日蓮宗	本行寺	諏訪堂南墓地	46	曹洞宗	高澤寺	97	浄土宗	紙漉沢墓地	42
	隣松寺		藤光寺		法立寺	垂柳墓地	44		無量庵	23		湯口墓地	20
	勝岳院		常源寺		本迹院	豊蒔墓地	40		実相庵	20		黒滝墓地	13
	寿昌院		月峰院		満行院	大根子墓地	38		延寿院	9		野崎墓地	12
	清安寺		安盛寺		貞昌寺	八反田墓地	31		願行寺	49		相馬一丁木墓地	11
	梅林寺		川龍院		徳増寺	田舎館墓地	31		来生寺	42		地形墓地	10
	宝積院		盛雲院		西福寺	田舎館墓地	28		円城寺	24		個人宅内の墓地・その他墓地	106
	陽光院		正伝寺		西光寺	畑中墓地	28		法王寺	10		総計	289
	鳳松院		永泉寺		天徳寺	大曲墓地	22		一乗庵	5			
	蘭庭院		子育地藏尊堂		遍照寺	高榎墓地	16		永昌寺	10			
	高徳院	小計	真教寺	枝川墓地	16	—	—						
	宝泉院	1404	尊徳寺	十二川原墓地	15								
	長徳寺	総計	円明寺	大根子田中墓地	10								
	福寿院	4197	法源寺	下大曲墓地	8								
	長勝寺		教応寺	新田墓地	5								
	横松院		浄徳寺	総計	350								
権蔵寺		善入院跡											
普門院		報恩寺											
小計	2793	袋宮寺											
		総計	2040										

* 旧浪岡町の事例は調査墓地数が不明のため割愛した

2. 墓標に刻まれた年号

墓標に刻まれた年号は、墓標自体が建てられた年(造立年)か、墓標に戒名が刻まれた人物の亡くなった年(没年)と考えられる。しかし近世墓標は単に「○年○月○日」とだけ刻む例が多く、それらの年号が造立年なのか没年なのか、容易に決められないケースもままある。先行研究では、ひとつの墓標に複数の年号が刻まれている場合、便宜的に最新年号をその墓標の「年代指標」として扱ってきた(自證院遺跡調査団編 1987ほか)。墓標の型式変遷を議論する場合には、実際に墓標が建てられた年代が重要であり、造立年が不明の場合、それに代わるものとしては最新年号が妥当といえる。ただしその場合でも、墓標造立後に亡くなった人の没年を追刻することは十分考えられるため、機械的に最新年号を造立年の代わりにはできない。また、本研究のように、いつ、何人死んだかを問題にする場合には、墓標の造立年よりも個々人の没年が重要である。

墓標から飢饉などの影響を読みとるためには、前提として、通常石製墓標を建てられる階層の人たちは、たとえ飢饉のような危機的状況下で亡くなった場合でも、墓標に記されている必要がある。石製墓標は造立に多額の費用を要するため、通常ならば石製墓標を建てるクラスの人であっても、飢饉などの非常時には建てるわけがない、したがって近世墓標から人口動態など読みとれるはずがないとこれまで考えられてきたように思える。しかし年回忌に際して以前亡くなった人物を遡って供養し、墓標を建てるのが一般的だったとすれば、事情は全く変わってくる。死者数の動態を墓標から読み取るには、まず、近世墓標が何を契機にいつ建てられたか明らかにする必要がある。墓標の年代に関わる基礎的問題については、弘前市新寺町寺院街の調査結果をもとに考える(関根・澁谷 2005)。

新寺町寺院街の近世墓標2040基中、造立年が明記されているのは109基(全体の5.3%)であり、天保期(1830年代)以降に急増する(図3)。造立年と没年の関係性をみるため、両方の年号が刻まれた50基(全体の2.5%)を検

討した。その結果、A「追刻のある墓標(13基 26%)」、B「一括記載の墓標(25基 56%)」、C「どちらか判別不能な墓標(12基 24%)」となった(図4)。Aは墓標が建てられた後の死者も追加していくタイプ、Bは墓標造立の前に亡くなった死者を一度にまとめて刻み、造立後の死者は記さないタイプ、Cは没年不明の死者がいるためA・Bどちらとも断定できないものである。Aに比べBの比率が高いことが確認できる。

次に造立年と最新年号の誤差の検証を行う。新寺町寺院街の事例では、全体の76%が12年以内の誤差にとどまっているが、一方で、20年以上ひらきを持つものも24%程度存在する(図5)。近世墓標の研究では、一般に時間軸を10年単位とするものが多いが、年代の誤差が一世代(およそ20年)を越す事例が全体の四分の一を占めているとすれば、分析結果への影響がないとはいえない。

最後に一括記載された没年と年回忌との関係性をみる。特に集中しているのは没後17回忌までである(図6)。その後、33回忌を除いて目立った傾向はみられない。33回忌が突出した傾向をみせる原因として、「弔いあげ」が関係すると思われる。弔いあげの時期は地方によって様々だが、分析結果は、弘前周辺では33回忌が弔いあげであったことを示している。よって墓標は、ある人物の死亡した年ではなく、没後17回忌までの間に建てられ、その際には、以前亡くなった人をも含め一括して戒名などを刻むのが一般的だったといえる。

造立年と最新年号の誤差は、ほとんどの場合12年以内に収まった。墓標型式の流行などを議論するのであれば、従来の年代決定法で特段支障はないことが証明されたといえよう。また、一般的にはある人物の死亡後、年回忌にあわせて墓標を建てるために、没年と造立年との間にはある程度の時間差が存在することが確認できた。よって飢饉など危機的状況下で亡くなった死者も、本来的に石製墓標を建てられる階層に属していれば、子孫に精神的・経済的ゆとりが生まれた時点で墓標に刻まれたと推察できる。通常ならば石製墓標を建てる階層の人であっても、飢饉などの非常時には建てるわけがない、したがって近世墓標から人口動態など読みとれるはずがない、という議論は成立しないことになる。

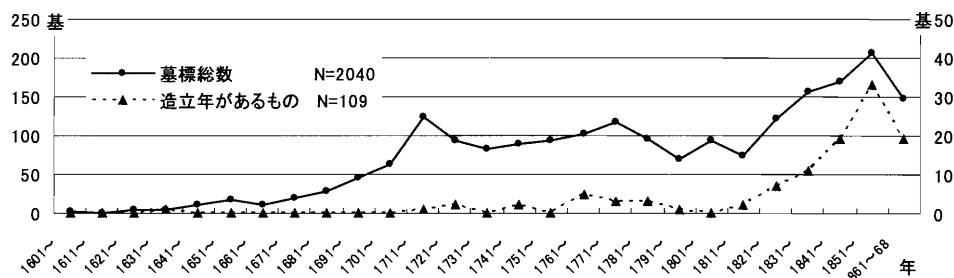


図3 弘前城下新寺町寺院街における近世墓標の造立数

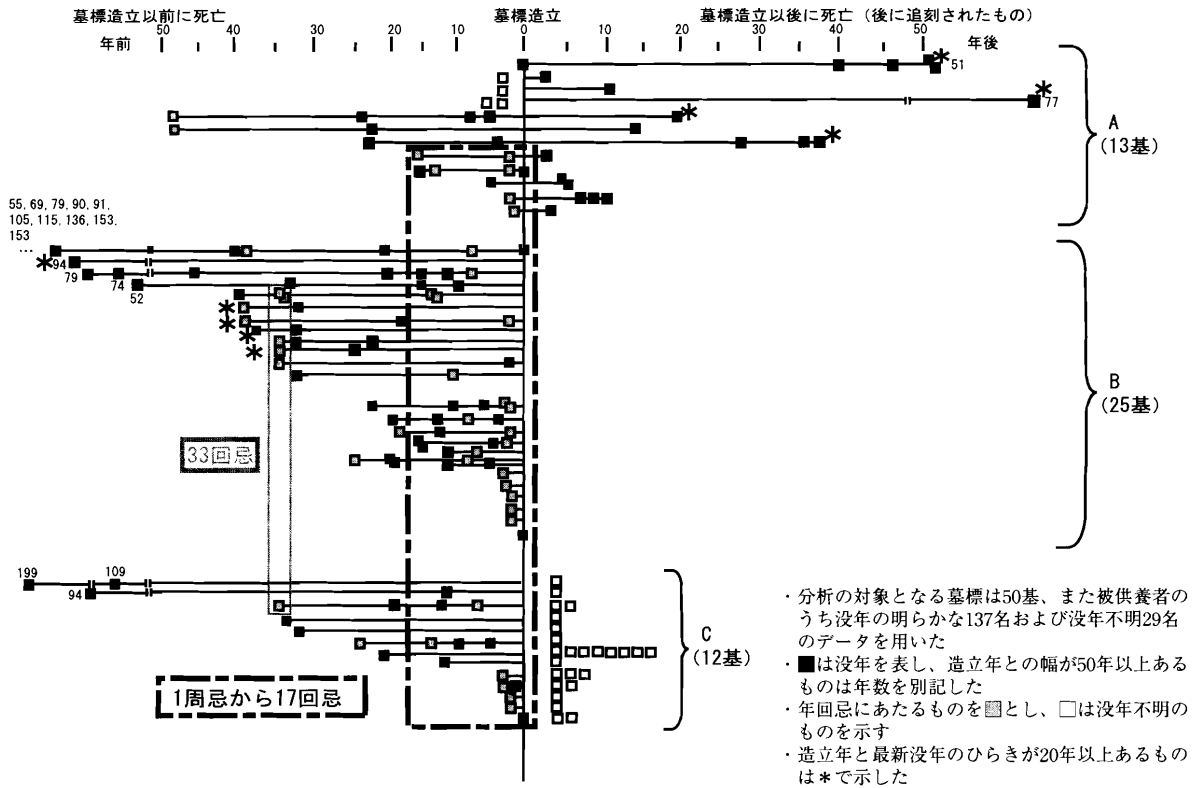


図4 墓標ごとにみた造立年と没年の関係性

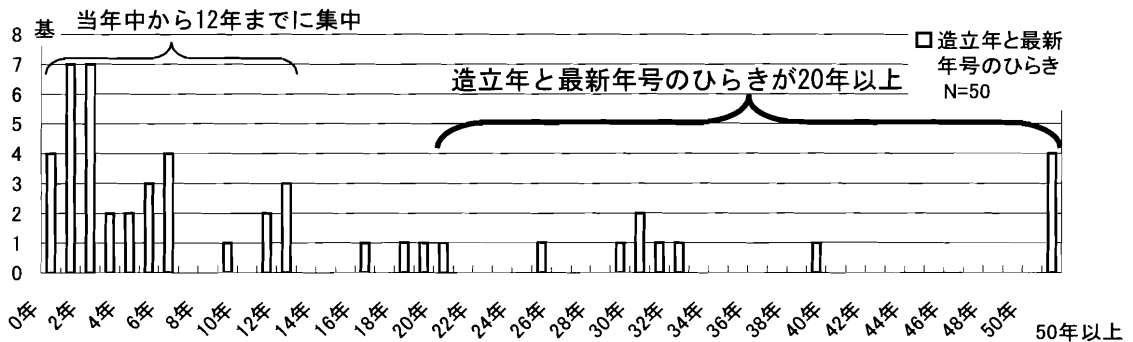


図5 造立年と最新年号のひらき

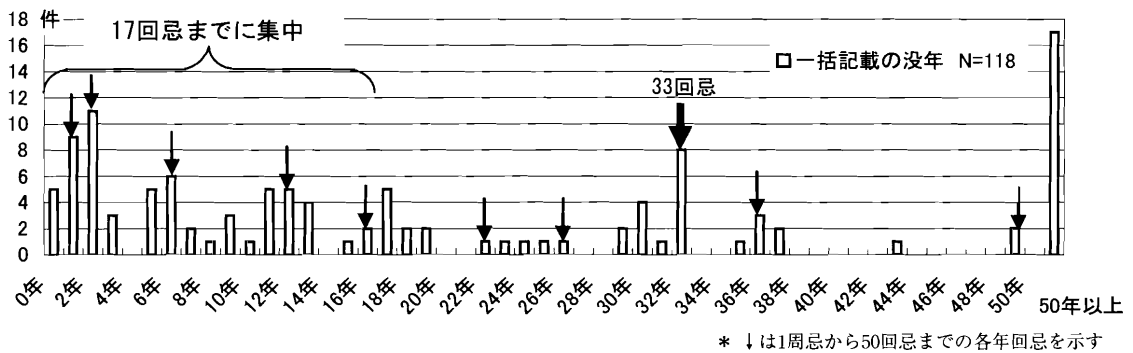


図6 墓標造立と年回忌 (造立年と一括記載された没年の幅)

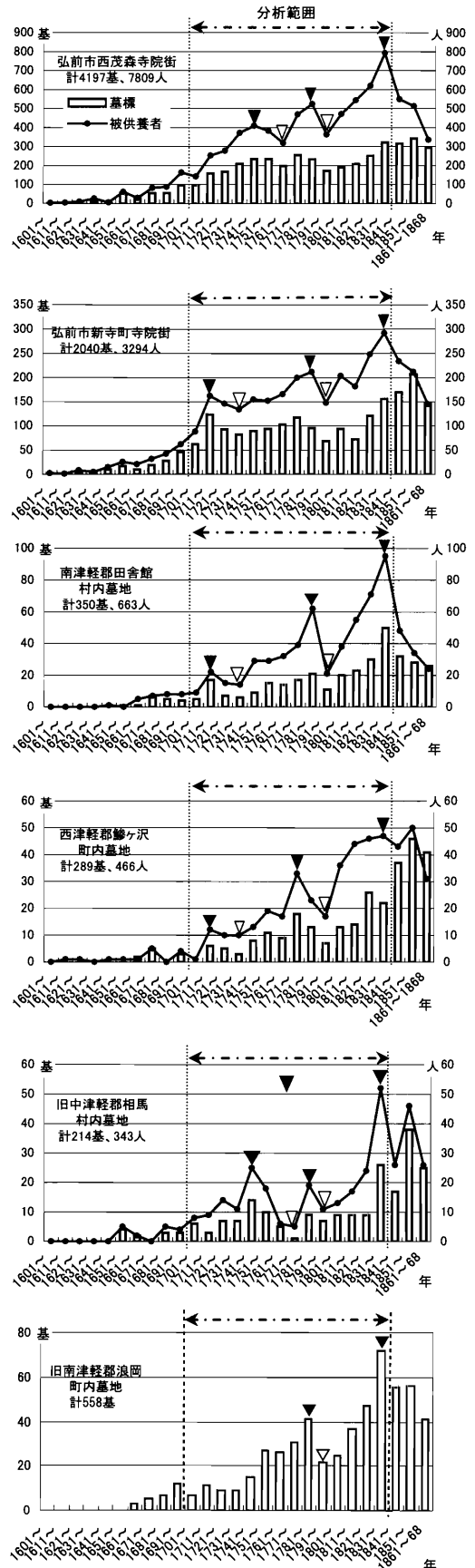
3. 墓標・過去帳・宗門人別帳の比較

(1) 墓標と過去帳の10年単位での比較

はじめに、津軽地方の墓標(総計7648基、12583人)と寺院過去帳(総計19144人)に基づき、10年単位でマクロ的变化を検討する。集計方法は従来通り、墓標数は造立年を基準とし、明記されていなければ最新年号で集計した。被供養者数は、便宜的に造立年以外の年号を没年として集計した。対象年代は慶長6～慶応4(1601～1868)年に至る267年間とした。そのうち分析可能な範囲は1700～1830年代(元禄期～天保期)である。なぜなら17世紀紀は墓標数自体が少なく、1840年代以降に亡くなった人は、墓標に記されるまでの時間差から、明治以降の年号を有する墓標へ刻まれている可能性があるためである。

図7は、調査地毎の墓標数と、墓標に刻まれた被供養者数の変遷を示している。墓標数と被供養者数のうち、より変動幅を読み取りやすい被供養者数の変遷を概観すると、3つの“山”(▼印)とそれらに挟まれた2つの“谷”(▽印)が認められる。第1の“山”はあまり明確でないが、新寺町寺院街・田舎館村内墓地・鯉ヶ沢町内墓地では1710年代に“山”があり、西茂森寺院街・旧相馬村内墓地では1740年代に被供養者数の増加がみられる。そして新寺町・田舎館・鯉ヶ沢は1730年代が、西茂森は1760年代、相馬は1770年代が“谷”に当たる時期となる。第2の“山”はいずれも1770・1780年代でほぼ一致し、“谷”部分は1790年代で完全に一致した。その後、被供養者数はおおむね増加傾向にあり、1830年代に第3の“山”を迎える。浪岡の事例を含めた墓標数の傾向も、基本的には被供養者数と同様の変遷を示す。以上のことから、津軽地方では墓標数・被供養者数ともに、18世紀前葉に顕著な増加がみられるものの、中葉には一旦減少、後葉に再び“山”、末葉に“谷”があり、その後19世紀前葉に再度増加することが明らかとなった。墓標の造立数および墓標に刻まれた被供養者数の増減傾向は概ね一致しており、城下町・港町・農村・山村という場の違いを超えて、地域的な共通性が強く看取される結果となった。

図8は、被供養者数が不明な浪岡を除いた5地点全ての墓標のデータをあわせて、10年単位で、墓標造立数ならびに墓標に刻まれた被供養者数の増減を示した。図9には、過去帳に記された被供養者数の増減を同じく10年単位で示した。次に両者が合致するか否かを検討する。A寺・湊迎寺どちらのデータでも主要な“山”が4つ存在する。第1の“山”(1690年代)と第2の“山”(1740年代)との間に“谷”が看取されるものの、長期的に見れば18世



* 没年不明の被供養者は除く

図7 墓標数と被供養者数の変遷

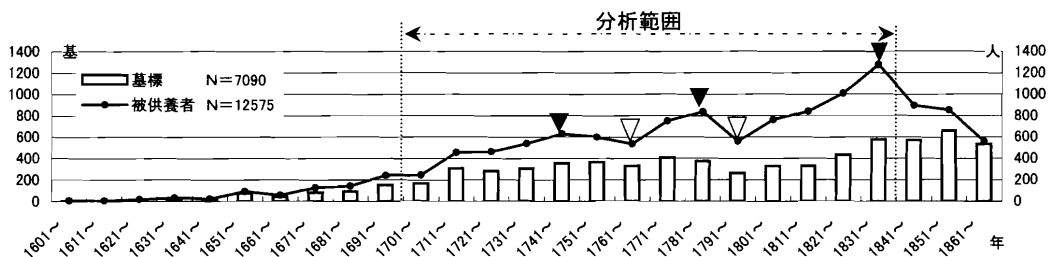


図8 津軽地方における墓標数と被供養者数の変遷 * ▼は“山”、△は“谷”を示す

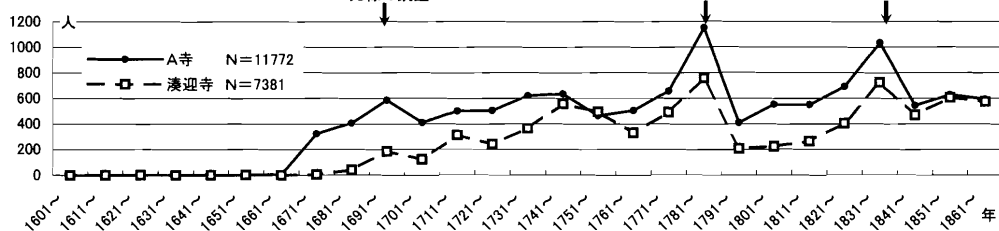


図9 A寺・湊迎寺過去帳における被供養者数の変遷 * 没年不明の被供養者は除く

紀前半代は被供養者数が増加する時期にあたる。第3の“山”は1780年代に、第4の“山”は1830年代にある。過去帳における被供養者数は、1690年代に第1の“山”を迎えている。この時期、まだ墓標数が少ないため、墓標からは読み取れない。18世紀中葉以降になると、被供養者数の変遷は墓標と過去帳とではほぼ一致ようになる。これらの“山”は、元禄・寛延・天明・天保の飢饉の時期と重なり、死者数の増加を反映している可能性が極めて高い。

(2) 墓標と過去帳の1年単位での比較

次に墓標と過去帳に記された被供養者数を1年単位で比較し、10年単位では捉えきれない細かな変化を検討する(図10・11)。分析に用いた資料は、図8・9と同様である。前述のように、1840年代以降に亡くなった人は、今回調査対象から除外した明治以降の年号を有する墓標へ刻まれている可能性があるため、検討できるのは1830年代以前である。なお、各年の被供養者数を評価する際には、その前20年間の被供養者数を平均した値(平常年の被供養者数)と比較する。

墓標の造立は18世紀中頃まで低調で、墓標に刻まれた被供養者の数も限られているため、元禄の飢饉が発生した元禄9(1696)年を除いて、18世紀前半以前は変化が読みとりにくい(図10-a)。元禄9年の墓標に刻まれた被供養者数は平常年の約3.5倍である。一方、過去帳をみると、この年、A寺では平常年の6.4倍、湊迎寺でも20倍に被供養者の数が急増している(図11-a)。墓標にも過去帳ほど明確ではないにせよ、元禄の飢饉による死者数の増加が現れているといえよう。この墓標と過去帳にみられる増加率の程度の違いは、飢饉で亡くなった人のうち、墓標を建ててもらえた人と、過去帳にだけ記録さ

れ墓標は建ててもらえなかった人の比率と理解できないだろうか。ただし、今回取り上げた近世墓標の約88%が弘前城下寺院街のものであるため、A寺過去帳と墓標の増加率を検討する。元禄の飢饉が発生した17世紀末、檀那寺をもつ人のうち墓標を建ててもらえた人の割合は、A寺のある弘前城下周辺で2人に1人程度という計算になる。その後、過去帳では寛延3(1750)年や宝暦6(1756)年に被供養者数の増加がみられ、寛延の飢饉や宝暦の飢饉の影響を読みとることができるが、墓標に刻まれた被供養者数には目立った変化はみられない(図10・11-b)。元禄・寛延・宝暦の飢饉を比較した場合、過去帳の被供養者数でも元禄の飢饉の突出ぶりが最も著しい。墓標そのものの数が限られている18世紀中葉以前の段階では、元禄の飢饉のような余程の大飢饉でもない限り、墓標に刻まれた被供養者数はさほど顕著な増減を示さないのかもしれない。

安永3(1774)年には、墓標・過去帳ともに被供養者数の増加が認められる(図10・11-c)。「元禄日記」には、この年、領内で疫病が流行し、死者が多数出たとの記録がある。その詳細な被害状況は不明だが、墓標に刻まれた被供養者数にその影響が現れている点からみて、飢饉なみの大量の犠牲者が発生したと推定できる。

墓標に刻まれた天明4(1784)年の被供養者の数は、平常年の4.5倍となっており、天明3・4(1783・1784)年に発生した天明の飢饉による死者数の急増を物語っている。過去帳に記された天明4年の被供養者の数は、A寺の場合は平常年の12.4倍、湊迎寺は8.8倍であり、墓標に比べ被害状況が2倍から3倍程強く現れている。墓標と過去帳にみられる差異を、飢饉で亡くなった人のうち、墓標を建ててもらえた人と、過去帳にだけ記録され墓標は建ててもらえなかった人の比率と理解するなら、

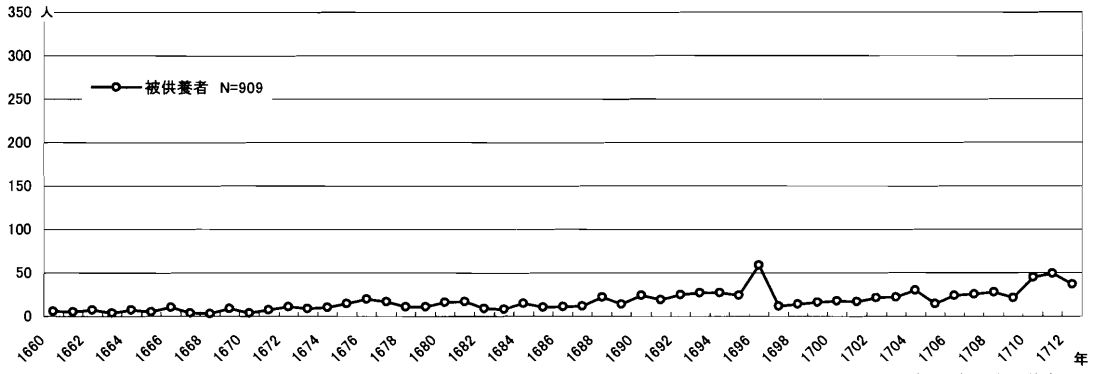


図10-a 津軽地方の墓標に記された被供養者数の変遷 *1659年以前の被供養者はごく少数であるため割愛した

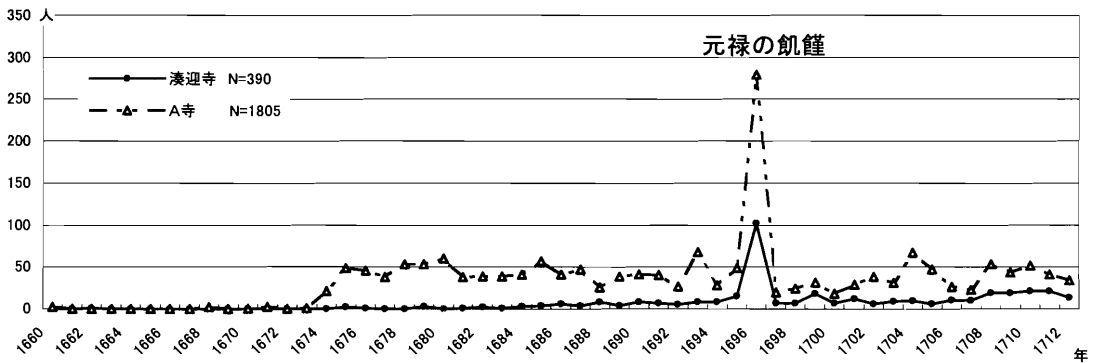


図11-a A寺・湊迎寺過去帳に記された被供養者数の変遷

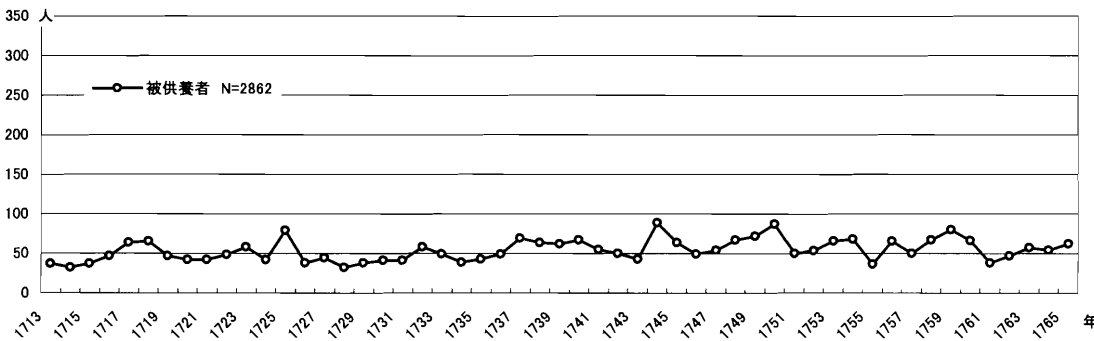


図10-b 津軽地方の墓標に記された被供養者数の変遷

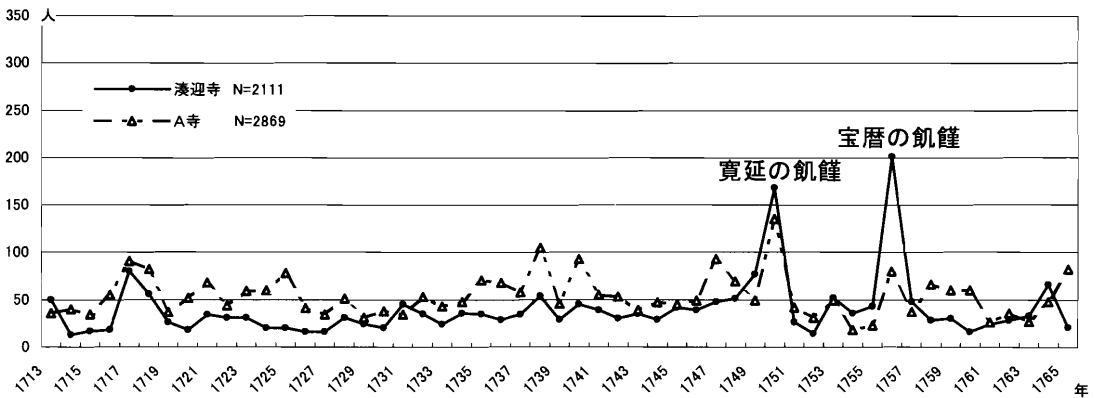


図11-b A寺・湊迎寺過去帳に記された被供養者数の変遷

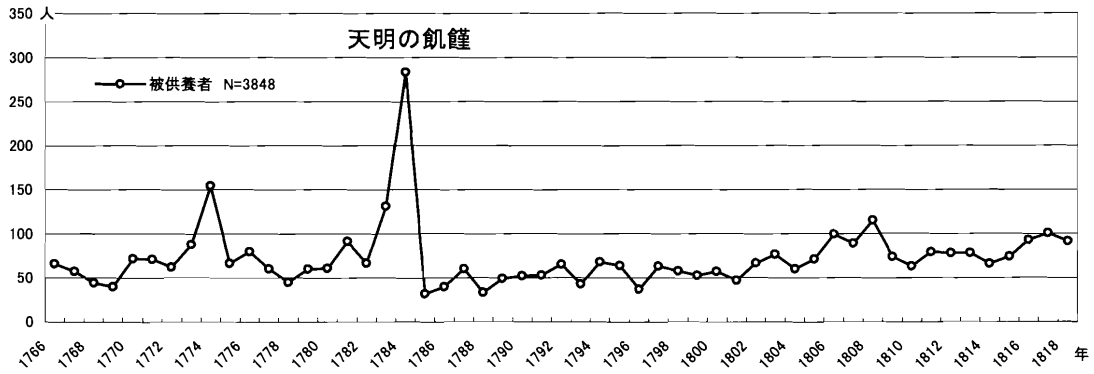


図10-c 津軽地方の墓標に記された被供養者数の変遷

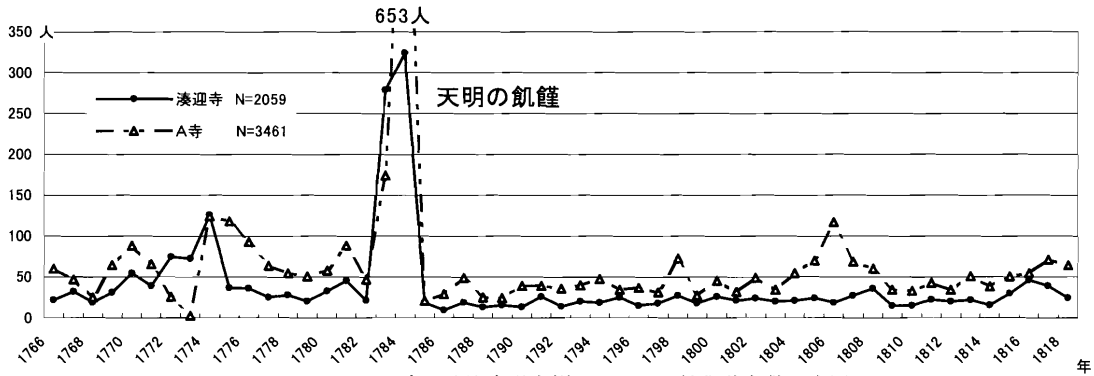


図11-c A寺・湊迎寺過去帳に記された被供養者数の変遷

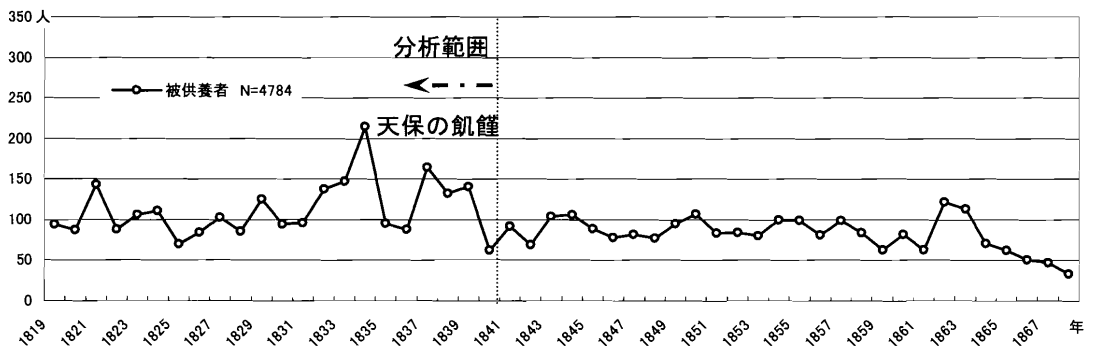


図10-d 津軽地方の墓標に記された被供養者数の変遷

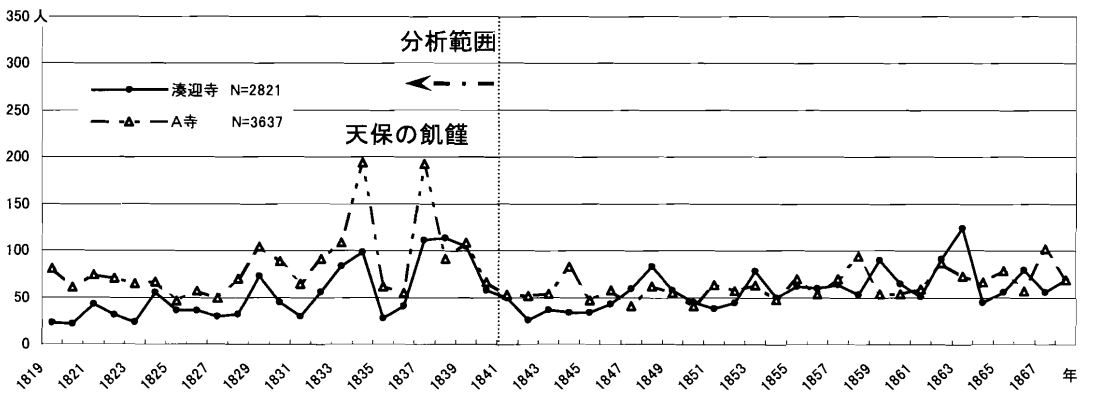


図11-d A寺・湊迎寺過去帳に記された被供養者数の変遷

天明の飢饉が発生した18世紀後葉の弘前周辺では、檀那寺をもつ人の2ないし3人に1人程度は墓標を建ててもらえた計算になる。後世失われた墓標を考慮するなら、当地域において18世紀末頃までには、檀那寺を持つ階層の人の半数程度が墓標を建てるような状況になっていたのではなかろうか。その後の約30年間、墓標に刻まれた被供養者の数は、増減を繰り返しながらもゆるやかに増加する。天保5(1834)年と天保8(1837)年には、比較的大きな“山”がみられ、それぞれ被供養者数は平常年の2.2倍、1.6倍となっている(図10・11-d)。過去帳では、A寺は平常年の2.8倍、湊迎寺は2.9倍となっている。天保の飢饉は「七年飢渴」と言われ、天保4(1833)年と天保7(1836)年の大凶作を挟んで長期間飢饉状態が続き、大量の死者が出たという(荒川 1979)。被供養者数が急増しているのはいずれも大凶作の翌年である。一般に飢饉による犠牲者が最も多く発生するのは、大凶作の年よりも翌年の春先から収穫前の夏頃とされる(菊池 1994)。したがって、天保4・7年の被供養者数の増加は、天保の飢饉による死者数の増加を正確に反映していると評価できる。天保の飢饉に関しては、墓標と過去帳で、平常年に対する被供養者数の増加率にあまり差がみられない。このことは、天保の飢饉が発生した1830年代頃には、檀那寺を有する人のほとんどが墓標を建てるようになったことを示していると思われる。

以上、墓標と過去帳を用いて、両者に記された被供養者数の変動を1年単位で比較検討した。その結果、10年単位では捉えきれない飢饉の影響が墓標に刻まれた被供養者数に現れていることが確認された。すなわち、津軽地方では墓標が十分普及しているとは言い難い17世紀末段階であっても、墓標に元禄の飢饉の影響を多少なりとも確認できた。18世紀後半以降は墓標と過去帳の被供養者数はほぼ連動しており、飢饉の年にはいずれも大幅に増加している。特に変動幅が墓標に近いのは、十三町の湊迎寺よりも弘前城下に所在するA寺の過去帳であった。これは、前述の通り墓標のほとんどが弘前城下寺院街に所在するため、城下の檀家を含むA寺の傾向と近似したと考えられる。寛延・宝暦の飢饉の影響は、墓標

からほとんど読み取ることができなかった。このうち、宝暦の飢饉については、湊迎寺の過去帳には顕著に現れているものの、墓標とA寺過去帳では確認できない。これは弘前藩の場合、宝暦の飢饉の犠牲者が在方を中心に発生し、城下周辺ではさしたる被害を出さずに済んだことを示しているのかもしれない。

(3) 墓標と宗門人別帳の比較

墓標と人口史料の間に、どの程度の相関関係があるのか確かめるため、弘前市新寺町寺院街の墓標に刻まれた被供養者数と「青森町宗門人別帳」の総戸数・総人数を比較検討した。対象年代は、宗門人別帳に記載のある嘉永5～文久2(1852～62)年までの11年間とし、1年単位で集計した。青森町の総戸数・総人数は、嘉永5～安政3(1852～56)年に至る5年間でそれぞれ年平均2.3%・2.15%の割合で増加している(図12)。転機が訪れるのは安政4(1857)年である。この年は、総人数こそ前年より僅かに増えているものの、総戸数は30軒近く減少している。この年以降、総人数の増加率は鈍り、総戸数は増減を繰り返しば横ばいとなる。新寺町寺院街において、墓標数・被供養者数ともに増加しているのは、「青森町宗門人別帳」で総戸数の減少が看取された安政4年と万延元(1860)年である(図13)。このように年単位の変化に関して、墓標数・墓標に刻まれた被供養者数の増加時期に、宗門人別帳の数値が減少・横ばいになる負の相関が確認された。少なくとも19世紀に限って言えば、墓標は歴史人口資料として有効であろう。

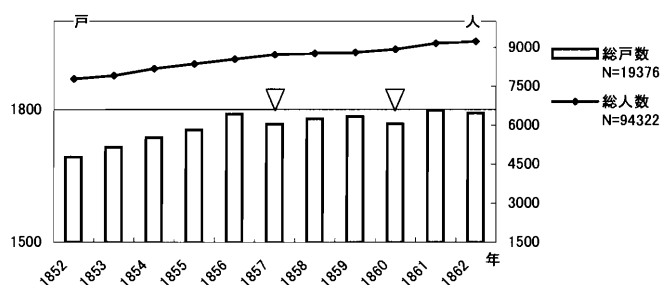


図12 「青森町宗門人別帳」における総戸数と総人数の変遷 [嘉永5～文久2(1852～62)年]

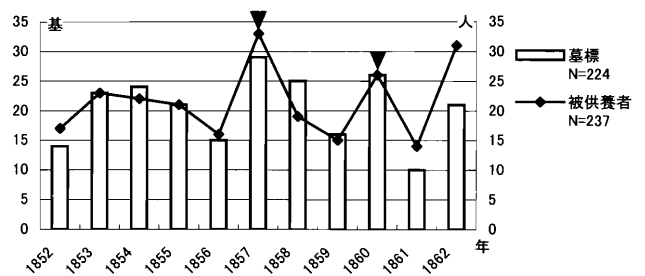


図13 弘前市新寺町寺院街における墓標数と被供養者数の変遷 [嘉永5～文久2(1852～62)年]

* ▲は“山”、▼は“谷”を示す

4. 年代別墓標造立数にみられる地域的特徴

(1) 目的と集計・分析方法

これまでの検証により、墓標が広く普及した時代に限れば、墓標から人口動態が読み取れ、人別帳をはじめとする人口史料の「空白地帯」であっても、墓標から死者数の変遷を迎える可能性が高いことが明らかとなった。

ところで、墓標そのものの数やそこに刻まれた被供養者の数に地域的な差異はないのだろうか。近世墓標の地域的様相は谷川章雄によってまとめられているが(谷川1988)、それは主に型式変遷に注目したものであり、近世を通じて墓標数がどのように変化するかについては述べられていない。近年、各地で大規模な墓標調査が行われるようになったが、全国的な視点から、墓標の数や被供養者数を論じた研究ははまだ存在しない。各地の近世墓標に関するデータをつきあわせることで、墓標の普及時期や飢饉の被害状況など、墓標数や墓標に刻まれた被供養者数に影響を及ぼす事象について新たな知見が得られるものと思われる。

今回取り上げる事例は、2006年7月現在までに刊行された報告書・論文とし、地域は、特殊な歴史的背景をもつ島根県石見銀山を除き、調査事例が比較的多い東北・関東・近畿地方に限定した。集計・分析方法は、各報告書・論文のデータに基づき、おおよそ1601年から1868年までを10年単位で再集計した。前述のように、幕末に亡くなった人は、明治以降の年号を有する墓標へ刻まれている可能性がある。明治以降の年号を有する墓標を調査対象から除外した場合、幕末の被供養者数が低く見積もられる可能性がある。対象とする墓標の年代は調査によって異なり、江戸時代の年号を有するもののみを対象としている場合もあれば、近現代の墓まで含めているものまで様々である。よって共通して比較できるのは、おおよそ1830年代以前ということになる。

(2) 年代別墓標造立数にみられる地域的特徴

分析に用いるのは、図14に調査の概要を示した16例である。地域別では、東北地方3例、関東地方5例、東海地方1例、北陸地方2例、近畿地方4例、中国地方1例となる。

調査場所毎に墓標数の変遷を図15・16に示した。墓標数の変遷には、概ね地域に対応するかたちでいくつかのパターンが存在する。

墓標造立数がピークを迎える時期に着目すると、早々と18世紀前半代には墓標数が急増するⅠ類(事例⑪～⑮)、増減を繰り返しながらも大局的には時代が下るに

つれ墓標数が増えていき、18世紀末から19世紀代に墓標造立数がピークを迎えるⅡ類(事例①～⑩)、17・18世紀は墓標の造立がきわめて低調で、19世紀代に入り急速に墓標が建てられるようになるⅢ類(事例⑯)の3類型に大別できる。

Ⅰ類は、事例⑮を除いて奈良・京都に特徴的にみられることから「畿内型」と呼ぶ。Ⅱ類は、事例⑩を除いて東北から北陸・東海地方にみられることから「東日本型」と仮称する。Ⅲ類は事例⑯のみであり、地域的特徴と言えるか否か現段階では判断できない。

Ⅰ類、すなわち「畿内型」は、18世紀以降の墓標造立数の変遷により、Ⅰa・Ⅰb・Ⅰcの3類型に細分可能である。Ⅰa類は、18世紀以降、増減を繰り返す事例⑪・⑫が該当する。Ⅰb類は、18世紀以降、墓標造立数が減少に転じ再び増加することのない事例⑬が該当する。Ⅰc類は、事例⑭・⑮が該当し、18世紀以降、墓標造立数がほぼ横這いで推移する点が特徴的である。Ⅰ類の各細別パターンがどのような理由に起因するかは不明である。なお、地域的にはⅡ類の「東日本型」に属すべき事例⑯の群馬県高崎市が「畿内型」の特徴を示す点についても、明確な理由はわからない。

Ⅱ類、すなわち「東日本型」は、「山」の位置によりⅡaとⅡbに細分できる。Ⅱa類は、第1の“山”が1710～30年代、第2の“山”が1770～90年代、第3の“山”が1830年代にある。事例①～④がⅡa類に相当する。東北地方から北関東に集中していることから、「東日本型」のなかでも「東北型」と呼べるかもしれない。Ⅱb類は、第1の“山”が1710～20年代、第2の“山”が1750～80年代、第3の“山”が1800～10年代にある。事例⑤～⑨がⅡb類に相当する。江戸を中心に関東・北陸・東海地方に特徴的にみられるため、「東日本型」のなかでも「関東型」といえそうである。

「東北型」と「関東型」の差異は、基本的には墓標が普及する時期の地域的ズレと、飢饉による人口変動の地域差に求めることができるのではなかろうか。すなわち、第1の“山”に関して「関東型」が「東北型」より10年程度早いのは、東北よりも江戸を含む関東周辺がいち早く墓標の流行を迎えたことを示している。また「東北型」の第2の“山”、第3の“山”は明らかに天明・天保の飢饉による死者数の増加を反映しているため、それらの飢饉の被害をあまり受けなかった関東地方では、“山”の位置がずれることになる。

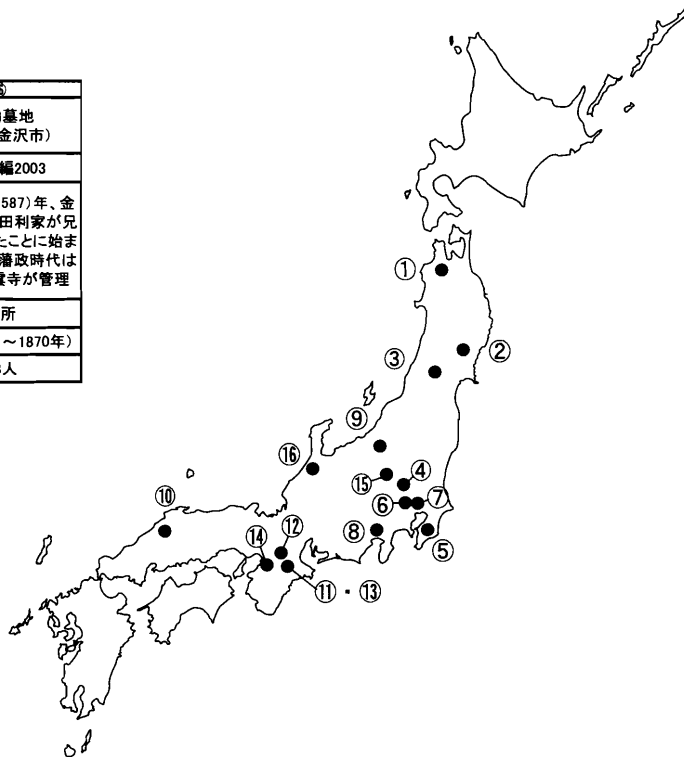
なお、Ⅱ類には、事例⑩の島根県大田市妙正寺跡墓地も含まれている。本事例の場合、17世紀初頭にひとつの“山”が形成されている点に、石見銀山のもつ歴史的特殊性が反映されており、地域的特質として一般化する事はできない。今後、中国・四国・九州地方の事例を検討する中で、Ⅱ類型の特徴、すなわち18世紀末から19世紀代

通し番号	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	
墓標調査地	津軽地方の墓地(青森県弘前市西茂森、同新寺町、南津軽郡田舎館村、西津軽郡鰺ヶ沢町、旧中津軽郡相馬村)	岩手県南部の墓地(岩手県西磐井郡平泉町、奥州市前沢区、同胆沢区)	天童市内墓地(山形県天童市)	小川町内墓地(埼玉県比企郡小川町)	高崎市内墓地(群馬県高崎市)	高滝・養老地区墓地(千葉県原市)	自證院墓地(東京都中野区)	牛込神楽坂周辺寺院群墓地(東京都新宿区)	霊山寺墓地(静岡県沼津市)
出典	相馬村教育委員会編1993、八木沢2000、関根・澁谷編2007	前沢町教育委員会編2002	小座間・村木2006	小川町編2000	高崎市市史編さん委員会編2003	谷川1988・1989	自證院遺跡調査団編1987	関口2000	沼津市教育委員会文化復興課編2002
歴史的環境	表1を参照のこと	農村	城下町および農村	農村	城下町・宿場町ならびに農村	農村	寛永十七(1640)年に名古屋藩2代藩主徳川光友室の生母(自證院)を葬ったことに始まる天台宗寺院	慶長・元和期(1596~1623年)の天下普請によって成立した寺院群	鎌倉時代後期は真言宗寺院であったが、16世紀中頃に曹洞宗に改宗
調査墓地数*1	56ヶ寺25ヶ所	詳細不明	6ヶ寺	29ヶ寺153ヶ所	4ヶ寺	13ヶ所	1ヶ寺	8ヶ寺	1ヶ寺
近世墓標数*2	7090基(1601~1868年)	887基(1631~1870年)	686基(1651~1870年)	10376基(1601~1870年)	2293基(1601~1868年)	336基(1601~1870年)	211基(1621~1870年)	348基(1631~1870年)	338基(1631~1867年)
被供養者数*2	12575人	—	—	—	3116人	568人	—	—	459人

*1 個人宅・墓標が10基未満の墓地は除く

*2 おおよそ1601~1868年までの年号を有する墓標と被供養者を分析対象とした

通し番号	⑨	⑩
墓標調査地	三俣地区墓地(新潟県南魚沼郡湯沢町)	野田山墓地(石川県金沢市)
出典	鈴木2001	金沢市編2003
歴史的環境	農村	天正十五(1587)年、金沢藩藩祖前田利家が兄利久を葬ったことに始まるとされる。藩政時代は曹洞宗桃臺寺が管理
調査墓地数*1	8ヶ所	1ヶ所
近世墓標数*2	461基(1651~1870年)	937基(1611~1870年)
被供養者数*2	—	908人

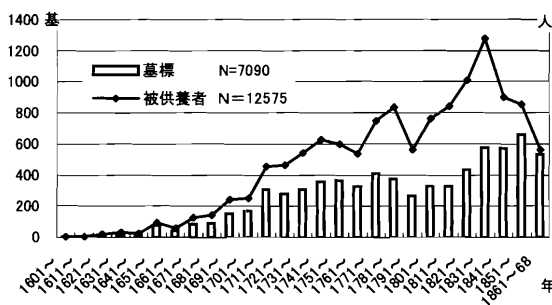


通し番号	⑪	⑫	⑬	⑭	
墓標調査地	妙正寺跡墓地(鳥根県大田市)	念仏寺墓郷内墓地(奈良県天理市)*3	木津惣墓(京都府相楽郡木津町)	念仏寺墓地(奈良県天理市)	大阪狭山市内墓地(大阪府大阪狭山市)
出典	鳥根県教育委員会・大田市教育委員会編2001	村木2004	坪井1939	白石・村木編2004	市川2002
歴史的環境	1520~1940年代に操業した石見銀山在郷町の日蓮宗寺院	念仏寺墓郷の一部で、埋葬は念仏寺墓地、墓標を村落内に建てる両墓制が行われていた。当報告は村落内墓地を調査対象とする。	農村	念仏寺墓地は10ヶ村の墓郷が共同利用する郷墓*3	城下町および周辺農村
調査墓地数*1	1ヶ所	2ヶ寺2ヶ所	1ヶ所	1ヶ寺	2ヶ寺9ヶ所
近世墓標数*2	373基(1601~1868年)	634基(1601~1870年)	1604基(1601~1870年)	4644基(1601~1870年)	7961基(1601~1869年)
被供養者数*2	—	633人	—	5548人	—

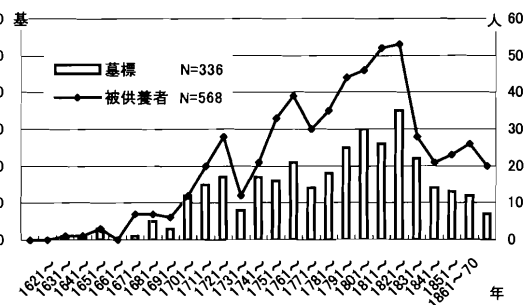
*3 墓地(郷墓)を共同利用する集団を墓郷という

図14 比較分析に用いた墓標調査事例とその概要

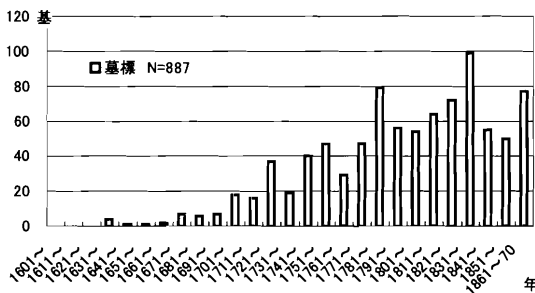
①青森県津軽地方(Ⅱa)



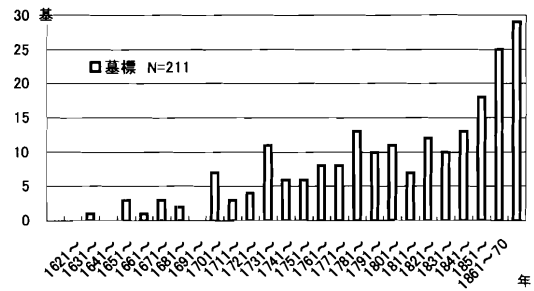
⑤千葉県市原市高滝・養老(Ⅱb)



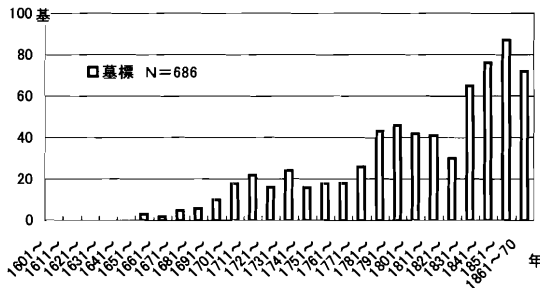
②岩手県南部(Ⅱa)



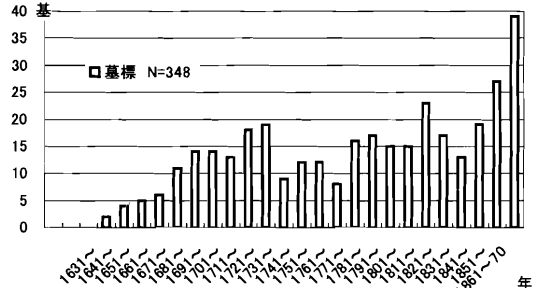
⑥東京都中野区自證院(Ⅱb)



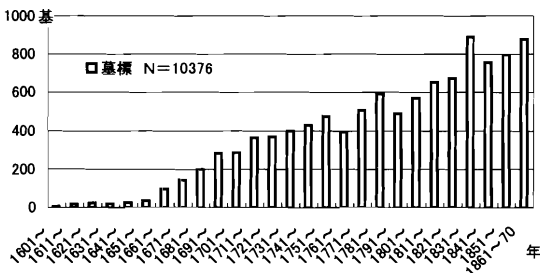
③山形県天童市(Ⅱa)



⑦東京都新宿区神楽坂周辺寺院群(Ⅱb)



④埼玉県比企郡小川町(Ⅱa)



⑧静岡県沼津市霊山寺(Ⅱb)

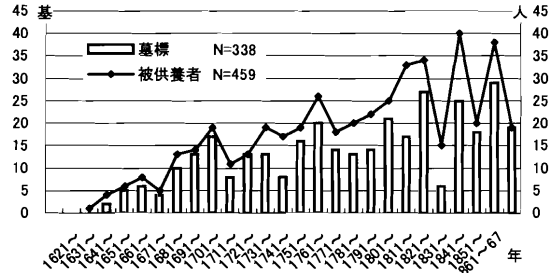
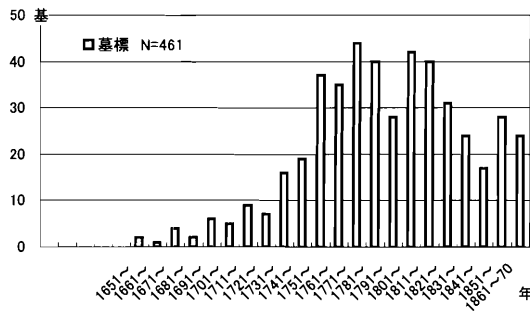
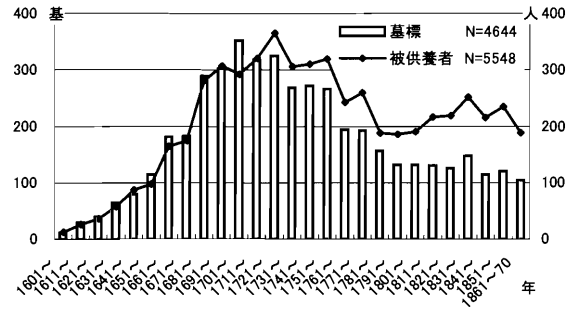


図15 各地の近世墓標の造立数(1)

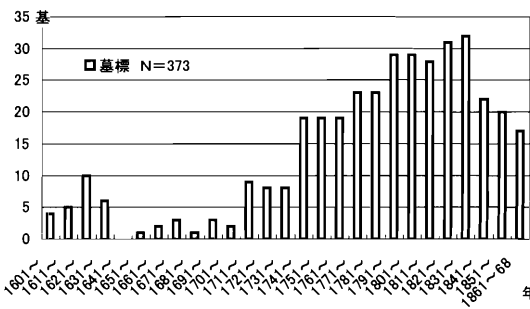
⑨新潟県南魚沼郡湯沢町三俣(Ⅱb)



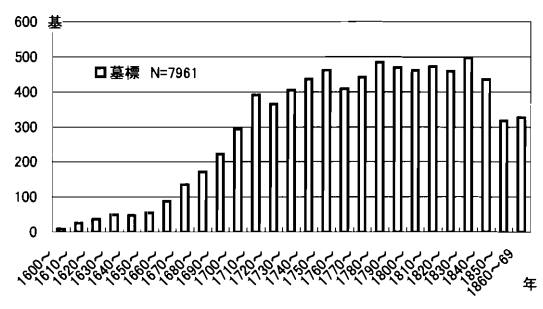
⑬奈良県天理市念仏寺(Ⅰb)



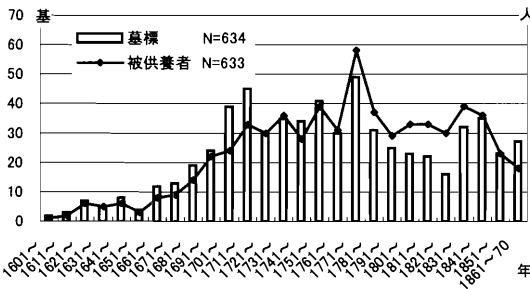
⑩島根県大田市妙正寺跡(Ⅱ)



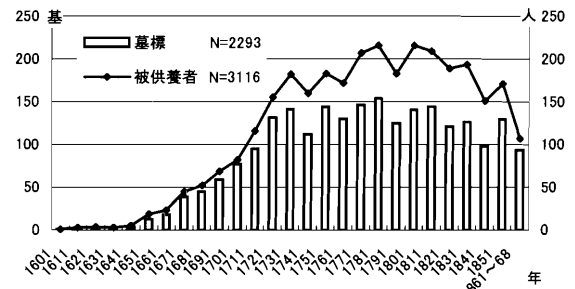
⑭大阪府大阪狭山市(Ⅰc)



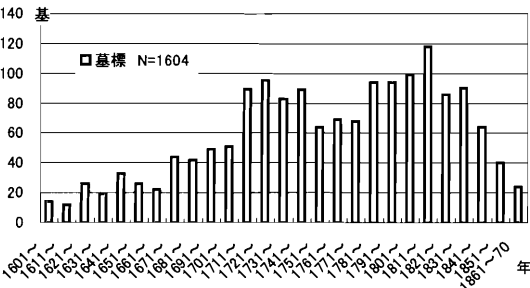
⑪奈良県天理市念仏寺墓郷(Ⅰa)



⑮群馬県高崎市(Ⅰc)



⑫京都府相楽郡木津町(Ⅰa)



⑯石川県金沢市野田山(Ⅲ)

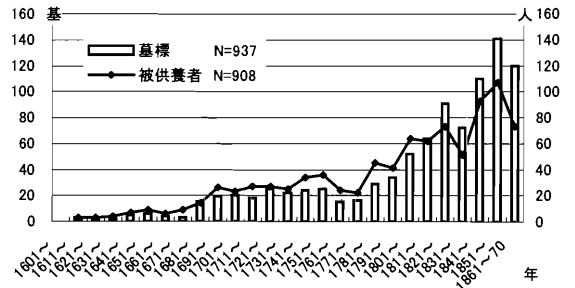


図16 各地の近世墓標の造立数(2)

に墓標造立数がピークを迎えることが確認できれば、Ⅱ類の名称は「東日本型」ではなく、「非畿内型」に改める必要があるだろう。Ⅲ類とした事例⑩金沢市野田山墓地は、加賀金沢藩主前田家の墓地として成立したが、後に上級武士、さらには下級武士・町人にも埋葬を許可した経緯をもつ。1780年代以後爆発的に増えているのは、被供養者の身分・階層の幅が拡大したことを示すと思われる、本事例をもって金沢周辺の地域的特質と見なすことはできない。

5. 結語

江戸時代は急速に文字資料が増加する時代であり、そうした傾向は、今回取り上げた墓標にも強く現れている。近世墓標は情報量が豊富な点に特質があり、考古学の分野においても多くの研究者が関心を寄せてきた。しかし、年号など墓標に刻まれた文字に対する資料批判はこれまで必ずしも十分ではなかった。墓標の造立年・没年・最新年号との関係性や、どの程度の人々が石製墓標を造立しえたのかなどの根本的な問題が看過されてきた。そうした基本的な問題が解決されない限り、墓標は真の意味で近世史研究の俎上にのらない。

これまで江戸時代の人口は、主として人別帳・宗門改帳・過去帳などの文書史料に基づき研究されてきた。しかし人別帳や宗門改帳は残存する数が限られており、過去帳は一般に閲覧が困難である。そうした点に鑑み、本論では近世墓標研究の方向性の一つとして歴史人口学を指向し、その可能性を追求した。

弘前市新寺町寺院街の2040基3294人分の墓標に刻まれた年号を調査・検討した結果、墓標は一般に、ある人物の没後17回忌までの間に建てられ、その際には既に亡くなっている人の分も併せて戒名などを刻むことがわかった。一方、これまで墓標の造立年に代わるものとして用いられてきた最新年号に関しては、4基に1基程度、造立年から20年以上の時間差があるものが存在することも判明した。

津軽地方の6ヶ所総計7648基12583人分の墓標と2ヶ寺総計19144人分の過去帳に関して、10年単位と1年単位で、被供養者数の増減を検討した結果、墓標と過去帳の連動性が確かめられた。また墓標に刻まれた被供養者数の増加時期に、「生者の記録」である宗門人別帳の総戸数・総人数が減少・横ばいになる負の相関関係が確認された。よって、歴史人口資料としての近世墓標の有効性が証明できたといえる。また、墓標と過去帳との比較から、弘前城下とその周辺において、檀那寺をもつ人が死後墓標に名を刻まれる割合は、18世紀代には2ないし3人に1人ほどであり、1830年代頃の当地域では檀那寺を有する人の大部分が墓標を建てるようになったと推察し

た。

北海道・九州・四国地方を除く16例合計39179基分の墓標を対象として、1600年代から1860年代まで、墓標数の増減を10年単位で検討したところ、地域と対応するいくつかのパターンが抽出できた。奈良や京都など畿内では、18世紀前半代には早くも墓標数が急増している。それに対し東日本では、増減を繰り返しながらも大筋では時代が下るにつれ墓標の数が増えていき、18世紀末から19世紀代に墓標造立数がピークを迎える。東日本のなかでも東北地方と関東・北陸・東海地方とでは、やや異なるパターンを示すが、この差異は基本的に墓標が普及する時期のズレと飢饉による人口変動の違いに起因すると考えられる。今後、九州・四国・中国地方のデータを追加検討し、今回、畿内型・東日本型とした分類の妥当性を見極める必要がある。それにより、墓標が普及する過程や、ある程度墓標が普及した後に発生した飢饉や疫病に関して、人的被害をも明らかにすることができよう。将来的には墓標を通して、天明の飢饉のような大災害による人的被害状況を藩単位で捉え、災害時の政治的・経済的環境を論じることも不可能ではない。

大名墓など一部の墓を除けば近世墓は文化財としての価値が確立していないため、無縁墓を保護する術は今のところ存在しない。幕末からおよそ140年、この間既に多くの近世墓標が失われてきたが、少子化が進み「家」の断絶が進めば無縁化する墓はより一層増加し、近世墓標の多くは近い将来姿を消しかねない。本論が歴史人口資料として近世墓標を位置づけたように、近世墓標は、江戸時代を語る上で不可欠な歴史資料である。近世墓標の滅失をくい止めることはできないまでも、今日残る近世墓標を悉皆調査し、それを記録として保存する行政的取り組みが望まれる。

謝辞

墓標調査を快諾して頂いた各寺院および次の関係機関・関係諸氏から御指導・御協力を賜った。末筆ではあるが、芳名を記して深く感謝申し上げる(敬称略)。

青森県文化観光部文化振興課県史編さんグループ、鯨ヶ沢町教育委員会、旧市浦村教育委員会、榊原滋高、白石陸弥、関口慶久、中田書矢、長谷川成一、堀内久子、水野良亮、村木志伸、八木沢誠次

引用・参考文献

- 青森県文化財保護協会編 1956『永禄日記』みちのく双書第1集
青森県文化財保護協会
阿部英樹・杉山聖子 2005「1寺院の過去帳からみた在郷町の死亡構造―出羽国田川郡大山村の事例―」『中京大学経済学論叢』第16巻 55-79頁 中京大学経済学部

- 荒川秀俊 1979『飢饉』教育社歴史新書94 教育社
- 市川秀之 2002「先祖代々の墓の成立」『日本民俗学』第230号 1-26頁 日本民俗学会
- 植村正治 1978「近世における豊凶状態と出生数・出生性比」『大阪大学経済学』Vol.27 No.4 66-85頁 大阪大学経済学部
- 大柴弘子 1983「近世後期近江農村の生活構造と月別出生数」『公衆衛生』Vol.47 No.12 73-79頁 医学書院
- 大柴弘子 1985「19世紀以降近江農村の母性健康障害一過去帳成人女子死因の考察一」『公衆衛生』Vol.49 No.7 65-71頁 医学書院
- 大柴弘子 1988「18世紀以降の近江農村過去帳にみる死亡の動向」『民族衛生』第54巻第1号 3-15頁 日本民族衛生学会
- 小川町編 2000『小川町の墓石調査報告書』小川町
- 金沢市編 2003『野田山墓地』金沢市文化財紀要200 金沢市埋蔵文化財センター
- 菊池勇夫 1994『飢饉の社会史』校倉書房
- 菊池勇夫 2003『飢饉から読む近世社会』校倉書房
- 菊池万雄 1980『日本の歴史災害一江戸後期の寺院過去帳による実証一』古今書院
- 木下太志 2002『近代化以前の日本の人口と家族一失われた世界からの手紙一』ミネルヴァ書房
- 鬼頭 宏 1976「徳川時代農村の乳児死亡一懐妊書上帳の統計的研究一」『三田学会雑誌』第69巻第8号 88-95頁 慶応義塾経済学会
- 鬼頭 宏 1998「もう一つの人口転換一死亡の季節性における近世的形態の出現と消滅一」『上智経済論集』第44巻第1号 11-34頁 上智大学経済学会
- 朽木 量 2001「異邦に生きた「日本人」の死一ニューカレドニア日系移民の墓標調査から一」『国立歴史民俗博物館研究報告』第91集 279-292頁 国立歴史民俗博物館
- 朽木 量 2004「墓標からみた近世の寺院墓地一神奈川県平塚市大神真芳寺墓地の事例から一」『国立歴史民俗博物館研究報告』第112集 451-463頁 国立歴史民俗博物館
- 熊本大学文学部日本史研究室 2003『石は語る』下益城郡中央町金石文遺物調査報告書 熊本大学文学部日本史研究室
- 孝本 貞 1988「現代における先祖祭祀の変容」『生者と死者一祖先祭祀一』83-106頁 三省堂
- 小座間直人・村木志伸 2006「天童市域における近世墓標の様相」『さあべい』第22号 128-160頁 さあべい同人会
- 後藤 明 1991「ハワイの日系石造文化財調査概報一初期移民文化と容像墓塔について一」『宮城学院女子大学研究論文集』73号 85-114頁 宮城学院女子大学文化学会
- 後藤 明 1992「ハワイの日系石造文化財調査概報Ⅱ(カウアイ島)一「石」の文化生態学にむけて一」『宮城学院女子大学研究論文集』75号 69-100頁 宮城学院女子大学文化学会
- 斎藤 修 1992「人口転換以前の日本における mortality一パターンと変化一」『経済研究』Vol.43 No.3 248-267頁 岩波書店
- 斎藤 修 2000「飢饉と人口増加速度一18-19世紀の日本一」『経済研究』Vol.51 No.1 28-39頁 岩波書店
- 坂詰秀一編 2002『池上本門寺 近世大名墓所の調査』池上本門寺奉賛会
- 自證院遺跡調査団編 1987『自證院遺跡一新宿区立富久小学校改築に伴う緊急発掘調査報告書一』東京都新宿区教育委員会
- 島根県教育委員会・大田市教育委員会編 2001『石見銀山 妙正寺跡』石見銀山遺跡石造物調査報告書1 島根県教育委員会
- 白石太一郎・村木二郎編 2004『国立歴史民俗博物館研究報告』第111集 国立歴史民俗博物館
- 「新編 弘前市史」編纂委員会編 2002『新編 弘前市史』通史編2 (近世1) 弘前市企画部企画課
- 「新編 弘前市史」編纂委員会編 2003『新編 弘前市史』通史編3 (近世2) 弘前市企画部企画課
- 杉山聖子 2004「近世後期から昭和戦前期の瀬戸内農村における死亡構造の時系列的分析一広島県賀茂郡中黒瀬村の寺院過去帳を事例として一」『農業史研究』第38巻 38-48頁 日本農業史学会事務局
- 鈴木 一 1984「一山村の天保クライシス一武蔵国多摩郡沢井村一」『地方史研究』第34巻第3号 35-47頁 地方史研究協議会
- 鈴木 尚・矢島恭介・山辺知行編 1967『増上寺徳川将軍墓とその遺品・遺体』東京大学出版会
- 鈴木宏美 2001「新潟県南魚沼郡湯沢町三俣の墓標群」『墓標研究会会報』第3号 4-5頁 墓標研究会
- 須田圭三 1987「過去帳資料による天保飢饉惨状の民族衛生学的研究」『日本の風土と災害』2-16頁 古今書院
- 関口慶久 2000「御府内における近世墓標の一樣相一東京都・牛込神楽坂周辺寺院群の墓標調査から一」『立正考古』第38・39合併号 51-84頁 立正大学考古学研究会
- 関口慶久 2004「近世東北の「家」と墓一岩手県前沢町大室鈴木家の墓標と過去帳一」『国立歴史民俗博物館研究報告』第112集 465-485頁 国立歴史民俗博物館
- 関根達人 2002「近世大名墓における本葬と分霊一弘前藩主津軽家墓所を中心に一」『歴史』第九十九輯 1-29頁 東北史学会
- 関根達人編 2003『津軽十三湊 湊迎寺過去帳の研究』弘前大学人文学部文化財論ゼミナール調査報告Ⅰ 弘前大学人文学部文化財論ゼミナール
- 関根達人 2004『津軽の飢饉供養塔』弘前大学人文学部文化財論ゼミナール調査報告Ⅲ 弘前大学人文学部文化財論ゼミナール
- 関根達人編 2005『下北・南部の飢饉供養塔一補遺 津軽の飢饉供養塔一』弘前大学人文学部文化財論ゼミナール調査報告Ⅴ 弘前大学人文学部文化財論ゼミナール
- 関根達人・澁谷悠子編 2007『津軽の近世墓標』弘前大学人文学部文化財論ゼミナール調査報告Ⅶ 弘前大学人文学部文化財論ゼミナール (2007年3月刊行予定)
- 関根達人・澁谷悠子 2005「墓石はいつ建てられたか一弘前城下新寺町寺院街の近世墓標に基づいて一」『二〇〇五年度 東北史学会 福島大学史学会 合同大会プログラム』10-11頁 東北史学会・福島大学史学会
- 関根達人・澁谷悠子 2006「歴史人口学における近世墓標の可能性一津軽地方の近世墓標に基づいて一」『日本考古学協会第72回総会研究発表要旨』198-201頁 日本考古学協会
- 相馬村教育委員会編 1993『相馬村の古碑』相馬村教育委員会
- 高木正朗 1996「19世紀東北日本の「死亡危機」と出生力」『社会経済史学』Vol.61 No.5 1-32頁 社会経済史学会
- 高木正朗・新屋 均 2006「近世国家の人口とその趨勢一仙台藩郡方人口・一関藩村方人口の復元 1668-1870年一」『立命館大学人文科学研究紀要』第87号 7-39頁 立命館大学人文科学研究所
- 高崎市市史編さん委員会編 2003『新編 高崎市史』資料編13 近世石造物墓石編 高崎市
- 高橋美由紀 2005『在郷町の歴史人口学一近世における地域と地方都市の発展一』ミネルヴァ書房
- 竹田聰州 1957『祖先祭祀一民俗と歴史一』平楽寺書店
- 竹田聰州 1977『村落同族祭祀の研究』吉川弘文館

- 立川昭二 1984『病いと人間の文化史』新潮社
- 谷川章雄 1988「近世墓標の類型」『考古学ジャーナル』第288号 26-30頁 ニューサイエンス社
- 谷川章雄 1989「近世墓標の変遷と家意識—千葉県市原市高滝・養老地区の近世墓標の再検討—」『史観』第121冊 2-16頁 早稲田大学史学会
- 谷川章雄 1991「江戸の墓地の発掘—身分・階層の表徴としての墓—」『甦る江戸』79-111頁 新人物往来社
- 谷川章雄 2001「近世墓標の普及の様相—新潟県佐渡郡両津市鷲崎、観音寺墓地の調査—」『ヒューマンサイエンス』Vol.14 No.1 22-31頁 早稲田大学人間総合研究センター
- 谷畑美帆 2002「近世埋葬人骨を用いた骨考古学的研究—東京都港区天徳寺寺域第3遺跡及び島根県安来市大日堂遺跡出土例を中心として—」『人類史研究』第13号 115-126頁 人類史研究会
- 坪井良平 1939「山城木津惣墓墓標の研究」『考古学』第10巻第6号 310-346頁 東京考古学会
- 時津裕子 1998「近世以降の墳墓の型式学的研究—筑前秋月城下を中心として—」『人類史研究』第10号 74-96頁 人類史研究会
- 時津裕子 2000「近世墓にみる階層性—筑前秋月城下の事例から—」『日本考古学』第9号 97-122頁 日本考古学協会
- 時津裕子・中園 聡・濱崎太輔 2003「アイカメラを用いた墓地空間・墓石認識パターンの認知考古学的研究」『日本考古学協会第69回総会 研究発表要旨』196-199頁 日本考古学協会
- 中川成夫 1968「平泉における近世墓地・石塔類の調査」『Mouseion』No.14 56-61頁 立教大学博物館学講座
- 長沢利明 1978「近世石造墓塔の歴史的变化—東京都西多摩郡檜原村笛吹地区の調査—」『日本民俗学』第116号 64-76頁 日本民俗学会
- 浪岡町史編集委員会編 2003『浪岡町史』別巻Ⅱ 浪岡町
- 成松佐恵子 1992『江戸時代の東北農村—二本松藩仁井田村—』同文館出版
- 西木浩一 1999『江戸の葬送墓制』都史紀要三十七 東京都公文書館
- 西木浩一 2004「江戸の墓制と身分」『歴史と地理』通号580号 40-48頁 山川出版社
- 沼津市教育委員会文化振興課編 2002『上香貫 霊山寺の近世墓』沼津市史編さん調査報告書 第十四集 沼津市教育委員会
- 長谷川成一 2004『弘前藩』吉川弘文館
- 速水 融 1968『日本経済史への視角』東洋経済新報社
- 速水 融 1973『近世農村の歴史人口学的研究』東洋経済新報社
- 速水 融 1983「幕末・明治期の人口趨勢—空白の四半世紀は?—」『プロト工業化期の経済と社会』数量経済史論集3 279-304頁 日本経済新聞社
- 速水 融 1998「近世後期大坂菊屋町の人口と乳幼児死亡」『千葉大学 経済研究』第13巻第3号 353-387頁 千葉大学経済学会
- 速水 融・斎藤 修・杉山伸也編 1989『徳川社会からの展望—発展・構造・国際関係—』同文館出版
- 弘前市立博物館編 1983『昭和57年度墓確認調査報告書 弘前の墓』弘前市立博物館
- 弘前市立博物館編 1984『昭和58年度墓確認調査報告書 弘前の墓』弘前市立博物館
- 福田アジオ 1988「寺檀関係と祖先祭祀」『生者と死者—祖先祭祀—』171-196頁 三省堂
- 藤井正雄 1993「現代の墓地問題とその背景」『家族と墓』6-24頁 早稲田大学出版部
- 前沢町教育委員会編 2002『川岸場Ⅱ遺跡発掘調査報告書 大室屋敷鈴木家墓地調査報告書』岩手県前沢町文化財調査報告書第13集 前沢町教育委員会
- 村木二郎 2004「郷墓と墓郷内の墓地との関係について—天理市中山念仏寺墓地と周辺墓地の調査から—」『大和の郷墓の考古学的研究』31-136頁 国立歴史民俗博物館
- 村越一哲 2001「武士の歴史人口学」『歴史人口のフロンティア』143-172頁 東洋経済新報社
- 八木沢誠次 2000「村の墓」『田舎館村誌』下巻 794-832頁 田舎館村
- 湯沢雅彦・中野洋恵 1982「江戸末期農村老人の人口比と世帯構成ならびに飢饉の影響—越前西北部4地域を中心として—」『社会老年学』No.16 20-26頁 東京大学出版会
- 横山浩一 1985「型式論」『日本考古学』岩波講座1 43-78頁 岩波書店

【関根達人, 連絡先: 弘前大学人文学部・青森県弘前市文京町1番地】

【澁谷悠子, 連絡先: 東北大学大学院文学研究科・宮城県仙台市青葉区川内27-1】

Changes in Population during the Edo Period Indicated by Gravestones

Tatsuhito Sekine and Yuko Shibuya

Up to the present, the population of the Edo period has been chiefly researched by consulting documentary historical materials. However, chances are limited because the number of existing documents is small, and from the viewpoint of privacy. Therefore, this report is an attempt to determine the changes in population of Edo period from gravestones.

From gravestones located in temple cemeteries at Shinteramachi of Hirosaki, Aomori Prefecture, it has been observed that they were generally built 16 years after someone's death. In this case, the Buddhist names, etc., of a group of people who have already died are carved together. The latest date of death in the group was examined to determine the year the stone was erected, and in 24% of the cases there was a time difference of 20 years or more from the earliest date inscribed to when it was erected.

The increase and decrease of the death toll was examined from the gravestones and *kakocho* (necrology) in the Tsugaru district. As a result, it was clarified that the population changes indicated by the gravestones synchronized with those indicated in the *kakocho*. In addition, a negative correlation was confirmed between the gravestones and *Shumon-ninbetsucho* (the religious registered records), and the effectiveness of early modern gravestones as materials of historical demography was proven. In Hirosaki and its surrounding areas in the 18th century, one in two or three people who belonged to a family temple could build a gravestone. It is thought that most people were able to build gravestones from about the 1830's.

The change in the number of gravestones has been analyzed in this paper from the researched examples of various places other than Hokkaido, Kyusyu, and the Shikoku region, which it divided roughly into three kinds. The number of gravestones increases rapidly in the Kinai area in Nara and Kyoto etc, in the first half of the 18th century. On the other hand, there is a peak in East Japan between the end of the 18th century and the 19th century. The tendency is a little different between the Tohoku region, and the Kanto, Hokuriku, and the Tokai regions in East Japan. It is thought that this originates basically in the gap between the times the gravestones became prevalent and the difference of the changes in population caused by famine.

Keywords:

Studied period: Early Modern period

Studied region: Tsugaru district, Aomori Prefecture

Study subjects: Early Modern gravestones, historical demography, famine